

先端医療に関する臨床心理士の意識調査 (第2報)

— 第二次調査結果の概要 —

兒玉憲一・内野悌司¹・磯部典子¹

(2005年9月30日受理)

The second survey of activities of clinical psychologists in medical fields
with highly advanced technology

Ken-ichi Kodama, Teiji Uchino, and Noriko Isobe

The purpose of this study was to reconsider some quantitative results of the first survey. In the first survey, activities and attitudes of 133 clinical psychologists (CPs) in medical fields with highly advanced technology were investigated. Those fields included six fields: care for cancer patients (CCP), HIV/AIDS counseling (HAC), counseling for infertile couples (CIC), neonatal care in NICU (NCN), genetic counseling (GC), and organ plantation care (OPC). In the second survey, a qualitative questionnaire was elaborated and distributed to 47 experienced and leading CPs in each field. By 42 successfully returned CPs, the first results in two fields: CCP and HAC were confirmed positively, but the results of other four fields: CIC, NCN, GC and OPC, were not confirmed. Because these four fields were still developing, the information for evaluating the results were difficult to be gathered. Finally, how to develop the professional networking among CPs in each field was discussed.

Key Words: highly advanced medical technology, clinical psychologist, professional networking, qualitative study

キーワード：先端医療，臨床心理士，ネットワーキング，質的研究

背景と目的

わが国の臨床心理士のうち、「保健・医療領域」を主たる所属先とする者は約3割を占め、しかもその大半は精神科医療に所属している(鶴, 2005)。これに対し、筆者らは、総合病院や大学病院で心理臨床に従事した経験から(兒玉・内野・喜花・森川, 2003)、身体疾患を抱える患者への心理臨床、とりわけ高度に進歩した診断および治療技術が駆使される先端医療における臨床心理士の活動に関心を持ってきた。とくに、筆者らが関心を寄せるのは、HIV (human immunodeficiency virus: ヒト免疫不全ウイルス) 医療、がん医療、周産期医療とくにNICU (natal intensive care unit: 新生児集中治療病棟)、生殖医療とくに不妊治療、遺伝医

療とくに遺伝相談、臓器移植医療の6分野である。この6分野を対象を絞り、臨床心理士の活動の実態を明らかにする試みを続けてきた。まず、6分野でパイオニア的な役割を果たしている臨床心理士の研究論文を展望した(兒玉・内野・磯部, 2003)。その結果、次の3点が明らかになった。①医療技術の進歩は、治癒率、生存率、さらにはQOL (生活の質) を高める一方、患者や家族に失望、ジレンマ、悲嘆など新たな心の問題を生み出している。②臨床心理士による心のケアは、分野を超えて共通のプロセスがある。すなわち、検査前および治療前の心理査定とカウンセリング、告知後の心理査定とカウンセリング、闘病中の心理社会的サポート、ターミナルケア、死別後の悲嘆カウンセリングといったプロセスである。③臨床心理士と他職種とのパートナーシップ、臨床心理士相互のネットワーク等には、分野間に大きな差が認められる。

¹広島大学保健管理センター

上記の点をより広範かつ実証的に検討するため、筆者らは全国規模の調査研究を行った（兒玉・内野・磯部、2004）その結果、①わが国の医療領域の臨床心理士のうち、上記6分野に従事したことのある臨床心理士は約3割で、その内訳は、がん医療44.2%、HIV医療16.4%、生殖医療（不妊治療）11.9%、周産期（NICU）医療10.2%、遺伝医療（遺伝相談）8.8%、臓器移植医療8.4%であった。②活動面では、多くの臨床心理士の臨床経験年数、担当事例数は少なく、半数が非常勤である一方で、心理面接、心理査定に加えて他職種のコンサルテーションも求められている。③意識面では、医師や看護師とは意思の疎通がよく図れている一方で、医療チームの中での役割が不明確で、困ったとき相談できる臨床心理士がいない、研修機会が少ない等の問題がある。

ただし、上記の結果は量的な質問票調査であったために、数値の背景の踏み込んだ詳細な分析ができなかった。そこで、先端医療に従事する臨床心理士の活動や意識の実態や問題点をあらためて詳しく明らかにするため、質的な側面を重視した第二次調査を行うこととした。具体的には、まず第一次調査の結果を回答者にフィードバックし自由記述の回答を得ることで、結果の妥当性や調査方法上の問題点を検討することとした。また、先端医療に従事する臨床心理士が所属している学会・研究会等を具体的に把握し、どのようなネットワークが望ましいかを明らかにすることとした。

研究方法

1 調査対象

第一次調査において、先端医療に従事したことのある回答者により詳細な第二次調査への協力を求めたところ、有効回答者133名のうち47名が記名のうえ協力を申し出た。そこで、この47名を第二次調査の対象とした。

2 調査票

第2次調査では、上述した2つの目的に沿って、以下のような質問票を作成した。質問1では、臨床心理士として従事している先端医療の分野7分野、すなわち、がん医療、HIV医療、周産期（NICU）医療、生殖医療（不妊治療）、遺伝医療（遺伝相談）、臓器移植医療およびその他の先端医療から選択してもらった。第一次調査で複数の分野に従事している場合が多かったため、本調査でも複数の分野での回答を可とした。質問2では、選択した各分野ごとに、第一次調査で明ら

かになった「臨床心理士の活動」および「臨床心理士の意識」の結果の要約を示し、これらの結果が現状を正しく反映していると思うかなど、感想や意見を主に自由記述形式で回答してもらった。また、「臨床心理士同士のネットワーク」について、現在所属している学会・研究会等を聞くとともに、有益と思われるネットワークのあり方について自由記述形式で回答してもらった。質問3では、回答者の性別、年代、臨床経験年数、主たる所属先を聞いた。最後に、全体に関する意見を自由記述で求めた。第一次調査と同じく無記名自記式で、A4サイズ14頁（表紙も含む）であった。

3 調査手続き

質問票は、平成17年3月に郵送法で対象者47名に送付され、同年4月末までに同じく郵送法で回収された。

結果

1 回収率

郵送した質問票のうち43票が回収された。属性がすべて記入されていない1票を除くと、有効回答は42票で、有効回収率は89.4%、第一次調査の32.3%にあたる。

2 回答者の属性別内訳

性別内訳：有効回答者（ $n=42$ ）の性別内訳は、男性5名（11.9%）、女性37名（88.1%）であった。男女比は1対8で、女性が圧倒的に多かった。第一次調査の男女比は1対4であった。

年代別内訳：回答者（ $n=42$ ）の年代別内訳は、30代が17名（40.5%）と最も多く、次いで40代12名（28.6%）、50代11名（26.2%）の順であった。30代と40代で全回答者の7割を占めた。第一次調査の回答者と比べると、50代の占める割合が今回8ポイント多かった。

臨床経験年数別内訳：回答者（ $n=42$ ）の臨床経験年数別内訳は、21年以上12名（28.6%）、6-10年9名（21.4%）、1-5年8名（19.1%）の順であった。10年以下が17名（40.5%）、11年以上が25名（59.5%）であり、第一次調査より、11年以上の割合が10ポイント多かった。これは、21年以上が多かったためである。

所属別内訳：回答者（ $n=42$ ）の所属別内訳は、総合病院16名（38.1%）、大学病院9名（21.4%）、大学7名（16.7%）であった。

3 回答者の分野別内訳

「その他の分野」（1名）を除く6分野に回答したのは、延べ71名（複数回答を含む）であった。分野別には、がん医療22名（31.0%）、HIV医療22名（31.0%）、遺伝医療9名（12.7%）、生殖医療7名（9.9%）、臓器移植医療6名（8.5%）、周産期医療5名（7.0%）であった。第一次調査と比べ、HIV医療で回答者の割合が高かったのは、筆者らと専門分野を同じくする協力者が多かったためと思われる。

回答者のうち臨床経験11年以上の割合を分野別に見ると、がん医療14名（63.6%）、HIV医療15名（68.2%）、周産期医療3名（60%）、生殖医療6名（85.7%）、遺伝医療9名（100%）、臓器移植医療6名（66.7%）であり、第一次調査と比べて各分野ともベテラン組が多かったことがわかる。これは、本調査の目的のためには、望ましいことと。

4 分野ごとの結果の概要

(1) がん医療分野の結果の概要

①臨床心理士の活動

<第一次調査結果の要約>

がん医療に従事した回答者100名のうち、

- ・過去3年間に担当したがん患者の事例数は、10例未満が76.0%、次いで30例以上19.0%の順。
- ・がん医療に従事した年数は、10年以下が86.9%。
- ・職場での立場は、常勤35.9%、非常勤28.7%。
- ・サービスの対象は、患者本人52.7%、家族25.8%、医療従事者21.0%の順。
- ・主なアプローチは、本人面接45.8%、家族面接23.1%、コンサルテーション19.8%の順。

<本調査の結果>

質問2-1-1で、上記の結果について「正しく反映していると思うか」と聞いたところ、回答者22名のうち「そうだと思う」14名（63.6%）、「そうとは思わない」が2名（9.1%）、「わからない」6名（27.3%）であった。「そうとは思わない理由」には、「コンサルテーションがもっと多い印象があるから」（No.22）という回答があった。

質問2-1-2で、「この結果から、心に浮かんだことを1つ」書いてもらった。もっとも多かったのは、「まだまだ臨床心理士ががん医療にかかわった歴史は浅い」（No.8）、「開発（開拓）途上にある領域」（No.10）と、11名（50.0%）が現状を否定的に見ていた。一方で、「（先端医療の中では）がん患者にかかわった臨床心理士が多い」（No.30）、「緩和ケア病棟が増えて、臨床心理士へのニーズが高まるだろう」（No.43）といった肯定的な回答もあった。

②臨床心理士の意識

<第一次調査結果の要約>

がん医療に従事した回答者のうち、

- ・「がん医療チームの中で、臨床心理士の役割がはっきりしている」を肯定したのは45.4%。
- ・「患者について主治医と気軽に話し合うことができる」を肯定したのは62.2%。
- ・「担当看護師と気軽に話し合える」を肯定したのは82.4%。
- ・「カンファレンスで臨床心理士として自由に発言できる」を肯定したのは61.9%。
- ・「がん患者について相談できる臨床心理士の先輩や仲間が身近にいる」を肯定したのは35.7%。
- ・「がん医療の情報入手のためにインターネットを使用できる」を肯定したのは67.3%。
- ・「がん患者にかかわるための研修機会に恵まれている」と肯定したのは36.4%。

<本調査の結果>

質問2-1-3で、上記の結果について「正しく反映していると思うか」と聞いたところ、回答者22名のうち「そうだと思う」12名（54.5%）、「そうとは思わない」4名（18.2%）、「わからない」4名（18.2%）であった。「そうとは思わない理由」には、「『医師と気軽に話し合うことができる』はこんなに多いとは思わない。がん医療が行われている施設の状況（専門の病棟があるか否かなど）によって異なるから」（No.11）という回答があった。

質問2-1-4で、「この結果から、心に浮かんだことを1つ」書いてもらった。「きちんと確立した立場でやっている先生の意見が反映しているのでは」（No.31）、「役割がはっきりしている病院と、そうでない病院との落差が大きいのでは」（No.9）、「がんセンターに勤務する人と、一般病棟での違いがあるのでは」（No.43）など、4名（18.2%）が上記の結果に疑問を抱く回答であった。ただ、「研修機会や同じ分野の仲間が少ない」（No.8）という点で、結果を肯定する回答が4名あった。

③臨床心理士のネットワーク

質問2-1-5で、「臨床心理士とつながるために参加している学会・研究会など」を聞いたところ、日本サイコロジック学会（関連の研究会を含む）4名、日本臨床心理士会3名、日本心理臨床学会3名が挙げられた。また、リーダーとしては、栗原幸江氏（県立静岡がんセンター）が挙げられた。

質問2-1-6で、「どのようなネットワークや組織があれば有益か」と聞いたところ、「あえてがん医療に特化した臨床心理士のネットワークが必要か」（No.39）

といった意見が多く、「総合病院の心理士のネットワーク」(No.1)、「緩和ケアに限定されない臨床心理士の研究会」(No.19)、さらには「同じような仕事をしている人たちの情報交換の場(医学的な部分も含め)」(No.31)、「緩和ケア・サイコソーシャルスタッフ・サポートネットワーク」(No.27)などのように、領域や職種を超えたネットワークを希望する回答が多かった。

(2) HIV 医療分野の結果の概要

①臨床心理士の活動

<第一次調査結果の要約>

HIV 医療に従事した回答者37名のうち、

- ・過去3年間に担当した事例数は、10-19例が62.2%だが、30例以上も24.3%。
- ・HIV 医療に従事した年数は1-5年が54.1%で、10年以下が89.2%。
- ・職場での立場は、常勤35.9%、非常勤28.2%、派遣カウンセラー33.3%。(派遣カウンセラーは、HIV 医療独特の公的な事業。)
- ・サービスの対象は、感染者本人43.0%、医療従事者21.5%、家族20.3%の順。
- ・主なアプローチは、本人面接41.6%、コンサルテーション23.4%、家族面接20.8%の順。

<本調査の結果>

質問2-2-1で、上記の結果について「正しく反映していると思うか」と聞いたところ、回答者22名のうち「そうだと思う」12名(54.5%)、「そうとは思わない」2名(9.1%)、「わからない」8名(35.4%)であった。「そうとは思わない」理由として、「HIV/AIDS に関わる臨床心理士は限られているため、上記の結果は偏っているのではないか」(No.21)とあった。

質問2-2-2で、「この結果から、心に浮かんだことを1つ書いてもらった。6名が、「感染者の急増する中、37名はあまりに少ない」(No.21)など、回答者数の少なさに言及したり、「医療領域に登録せずに携わっているのだろうか」(No.16)と調査方法の限界を指摘していた。一方、「見えにくさを感じていたが、こういう結果なんだと概要が分った」(No.8)、「サービスの対象で、医療従事者が家族よりも多いことに改めて気づかされた」(No.30)など、肯定的な回答もあった。

②臨床心理士の意識

<第一次調査結果の要約>

HIV 医療に従事した回答者37名のうち、

- ・「HIV 医療チームの中で、臨床心理士の役割がはっきりしている」を肯定したのは69.4%。
- ・「感染者患者について主治医と気軽に話し合うことができる」を肯定したのは80.6%。

- ・「担当看護師と気軽に話し合える」を肯定したのは66.7%。
- ・「カンファレンスで臨床心理士として自由に発言できる」を肯定したのは63.9%。
- ・「感染者患者について相談できる臨床心理士の先輩や仲間が身近にいる」を肯定したのは69.5%。
- ・「HIV 医療の情報入手のためにインターネットを使用できる」を肯定したのは66.7%。
- ・「感染者患者にかかわるための研修機会に恵まれている」と肯定したのは77.8%。
(「相談できる臨床心理士」と「研修機会」は、他の分野と比較して有意に高い。)

<本調査の結果>

質問2-2-3で、上記の結果について「正しく反映していると思うか」と聞いたところ、回答者22名のうち「そうだと思う」15名(68.2%)、「そうとは思わない」4名(18.2%)、「わからない」および無回答3名(13.6%)であった。「そうとは思わない理由」には、「拠点病院によって臨床心理士の役割認識には大きな差がある」(No.35)を始め3名が、地域や病院による差が大きいことを挙げていた。

質問2-2-4で、「この結果から、心に浮かんだことを1つ書いてもらったところ、「医療チームにしっかりと組み込まれた形で仕事をしていることがわかり、この分野の臨床心理士の位置付けが明確なのだと感じた」(No.8)など、半数が他領域より恵まれているといった内容の回答であった。「意図的に、かつ必要に迫られて、仲間とのネットワークをつくってきた成果」(No.32)、「HIV 医療は公的支援が大きく、特殊」(No.19)と背景を指摘する回答もあった。

ところで、「常勤と派遣では数値が異なるのでは」(No.43)という指摘があったので、常勤、非常勤、派遣という勤務形態で「活動」と「意識」に違いがあるかを統計的にあらためて検定したが、いずれの項目においても有意な差は認められなかった。

③臨床心理士のネットワーク

質問2-2-5で、臨床心理士とつながるために参加している学会・研究会などを聞いたところ、日本エイズ学会9名、日本臨床心理士会5名、日本心理臨床学会5名、全国HIV 心理臨床研究会4名の他、各地のHIV 診療ネットワークなど様々な団体やMLが挙げられた。リーダーとして、小島賢一氏(荻窪病院)が挙げられた。

質問2-2-6で、「どのようなネットワークや組織があれば有益か」と聞いたところ、がん医療分野と同じく、他職種を含めたネットワークを求める回答がほとんどだった。「臨床心理士に限らず、HIV 医療に関する人

が広く集まれるのが前提で、その上で、分科会のように臨床心理士のネットワークがあってもよい。」(No.19)、「HIV 医療に限らず、先端医療に関わっている身近な（同じ地域の）仲間の集まり。」(No.25)、「HIV で区切らず、『医療におけるカウンセリング』の研修・交流が有益と考える。」(No.16) など、かなり共通した回答であった。

(3) 周産期 (NICU) 医療分野

①臨床心理士の活動

<第一次調査結果の要約>

NICU を中心とした周産期医療に従事した回答者22名のうち、

- ・過去3年間に担当したNICUの患児・親の事例数は、10例未満が72.7%、30例以上22.7%の順。
- ・NICU 医療に従事した年数は、5年以下が66.7%だが、11年以上も23.8%。
- ・職場での立場は、常勤54.5%、非常勤31.8%。
- ・サービスの対象は、患児と親が54.1%、医療従事者も32.4%。
- ・主なアプローチは、患児・親面接が48.7%、他職種へのコンサルテーションも35.9%。

<本調査の結果>

質問2-3-1で、上記の結果について「正しく反映していると思うか」と聞いたところ、回答者5名全員が、「そうとは思わない」と回答した。「そうだと思う理由」として、「NICU 専門に関わっているのではない心理士の回答が多いのかと思う」(No.2)、「常勤といっても、NICU 専属の常勤と小児科や精神科兼務の常勤もいるので、分けて分類してほしい」(No.17)、「未熟児新生児学会のワークショップで行われた調査と結果が異なる」(No.38) という回答であった。NICU 専属の臨床心理士の活動実態がすでに把握されていることが明らかになった。

質問2-3-2で、「この結果から、心に浮かんだことを1つ」書いてもらった。「(どの程度) NICU に日常的に心理士がかかわっているか、明確化できるような調査を」(No.4, No.17) という要望がある一方で、「ここ数年でNICUの臨床に従事する方が急激に増えていますが、NICU 専属の常勤は全国で1名のみで、常勤の方の業務のひとつでNICUに携っている」(No.38) という情報提供もあった。

②臨床心理士の意識

<第一次調査結果の要約>

- NICU 医療に従事した回答者22名のうち、
- ・「NICU 医療チームの中で、臨床心理士の役割がはっきりしている」を肯定したのは81.0%。
- ・「患児・親について主治医と気軽に話し合うことができる」を肯定したのは52.4%。

- ・「担当看護師と気軽に話し合える」を肯定したのは81.0%。
 - ・「カンファレンスで臨床心理士として自由に発言できる」を肯定したのは52.3%。
 - ・「患児・親について相談できる臨床心理士の先輩や仲間が身近にいる」を肯定したのは54.5%。
 - ・「NICU 医療の情報入手のためにインターネットを使用できる」を肯定したのは86.4%。
 - ・「患児・親にかかわるための研修機会に恵まれている」と肯定したのは50.0%。
- (この分野では、いずれの項目でも、HIV 医療に次いで肯定的であった。)

<本調査の結果>

質問2-3-3で、上記の結果について「正しく反映していると思うか」と聞いたところ、回答者5名のうち「そうだと思う」4名、「そうとは思わない」1名であった。「そうとは思わない理由」は、「(仲間や研修機会に恵まれているのは) 自主的な勉強会をしているからで、学会などの研究会や研修会はない」(No.17) という回答であった。

質問2-3-4で、「この結果から、心に浮かんだことを1つ」書いてもらったところ、「NICU 医療の中で、臨床心理士の存在はかなり肯定的に受け入れられる土壌ができており、連携が比較的とれているのかもしれない」(No.2) という回答があった。

③臨床心理士のネットワーク

質問2-3-5で、「臨床心理士とつながるために参加している学会・研究会など」を聞いたところ、周産期心理士ネットワーク、周産期心理グループスーパービジョンの会、日本心理臨床学会、未熟児新生児医学会などが挙げられた。

質問2-3-6で、「どのようなネットワークや組織があれば有益か」と聞いたところ、「事例検討会や情報交換を通じて自分の臨床を支えあえるようなネットワーク。ネットワークのメンバーの中で、個人スーパービジョンを行ったり、新人への実習も行なっている」(No.2, 38) という実績を踏まえた回答があった。

(4) 生殖医療 (不妊治療) 分野

①臨床心理士の活動

<第一次調査結果の要約>

不妊治療を中心とした生殖医療に従事した回答者27名のうち、

- ・過去3年間に担当した不妊のカップルの事例数は、10例未満が81.5%。
- ・不妊治療に従事した年数は、10年以下が88.5%。
- ・職場での立場は、常勤51.9%、非常勤37.0%。

- ・サービスの対象は、患者本人69.2%、パートナー23.1%、医療従事者7.7%の順。
- ・主なアプローチは、本人面接51.1%、家族面接19.1%、心理査定17.0%の順で、他職種へのコンサルテーションは4.3%に過ぎなかった。
(多くが、経験年数も担当事例も少なかった。サービスの対象は、本人及びパートナーが9割。)

<本調査の結果>

質問2-4-1で、上記の結果について「正しく反映していると思うか」と聞いたところ、回答者7名のうち、「そうだと思う」4名、「そうとは思わない」1名、「わからない」2名であった。「そうだと思わない」理由として、「医療的に問題がある場合は今までのやり方でいいかもしれないが。」(No.40)と釈然としないような回答であった。

質問2-4-2で、「この結果から、心に浮かんだことを1つ書いてもらったところ、「専門として関わっている臨床心理士の少なさが印象的」(No.30)という回答がある一方で、「今後ますます必要になる領域」(No.21)という前向きな回答もあった。

②臨床心理士の意識

<第一次調査結果の要約>

- 不妊治療に従事した回答者27名のうち、
- ・「不妊治療チームの中で、臨床心理士の役割がはっきりしている」を肯定したのは40.0%。
 - ・「患者について主治医と気軽に話し合うことができる」を肯定したのは60.0%。
 - ・「担当看護師と気軽に話し合える」を肯定したのは48.0%。
 - ・「カンファレンスで臨床心理士として自由に発言できる」を肯定したのは48.0%。
 - ・「患者について相談できる臨床心理士の先輩や仲間が身近にいる」を肯定したのは20.0%。
 - ・「不妊治療の情報入手のためにインターネットを使用できる」を肯定したのは60.0%。
 - ・「不妊患者にかかわるための研修機会に恵まれている」と肯定したのは20.0%。
(ほとんどの項目が他の分野に比べて低く、とくに「相談できる臨床心理士がいる」と「研修機会がある」を肯定したのがかなり低かった。)

<本調査の結果>

質問2-4-3で、上記の結果について「正しく反映していると思うか」と聞いたところ、回答者7名のうち「そうだと思う」5名、「わからない」1名であった。

質問2-4-4で、「この結果から、心に浮かんだことを1つ書いてもらったところ、「研修の機会にも恵まれず、孤軍奮闘している」(No.15)と現実を厳しく受

け止めているが、「臨床心理士に関心を持ってもらう方法を考える必要がある」(No.7)と意欲的な回答もあった。

③臨床心理士のネットワーク

質問2-4-5で、「臨床心理士とつながるために参加している学会・研究会など」を聞いたところ、日本生殖医療心理カウンセリング研究会(現、学会)、国際不妊カウンセリング機構、日本不妊カウンセリング学会が挙げられた。リーダーとして、平山史朗氏(東京HARTクリニック)が挙げられた。

質問2-4-6で、「どのようなネットワークや組織があれば有益か」と聞いたところ、「不妊治療そのものを研修する場」(No.30)、「小さくてもよいので定期的開催できる勉強会」(No.7)、「MLによる情報提供」(No.21)と意見が分かれた。

(5) 遺伝医療(遺伝相談)分野

①臨床心理士の活動

<第一次調査結果の要約>

遺伝相談を中心とした遺伝医療に従事した回答者19名のうち、

- ・過去3年間に担当した遺伝相談の事例数は、10例未満が78.9%、10-19例15.8%。
- ・遺伝相談に従事した年数は、10年以下が72.2%だが、11年以上も27.8%。
- ・職場での立場は、常勤63.2%、非常勤21.1%。
- ・サービスの対象は、クライアント本人50.0%、家族33.0%、医療従事者16.7%の順。
- ・主なアプローチは、本人面接33.3%、家族面接25.0%、心理査定20.8%、他職種へのコンサルテーション18.8%の順で、多様だった。

<本調査の結果>

質問2-5-1で、上記の結果について「正しく反映していると思うか」と聞いたところ、回答者9名のうち、「そうだと思う」8名、「わからない」1名であった。

質問2-5-2で、「この結果から、心に浮かんだことを1つ書いてもらったところ、「遺伝相談は一部の臨床心理士は昔から関わってきたが、やっと最近になって注目されるようになってきた」(No.14)、「臨床心理士が関与する必要性をもっとみんなで学習し、この分野での仕事を開拓しなければ」(No.8)と意欲的な回答があったが、「医療独自の遺伝カウンセラーの養成があるために、臨床心理士は少ないのでは」(No.13)と危惧する回答もあった。

②臨床心理士の意識

<第一次調査結果の要約>

- 遺伝相談に従事した回答者19名のうち、
- ・「遺伝医療チームの中で、臨床心理士の役割がはっきりしている」を肯定したのは40.0%。

- きりしている」を肯定したのは60.0%。
- ・「クライアントについて主治医と気軽に話し合うことができる」を肯定したのは75.0%。
- ・「担当看護師と気軽に話し合える」を肯定したのは65.0%。
- ・「カンファレンスで臨床心理士として自由に発言できる」を肯定したのは70.0%。
- ・「クライアントについて相談できる臨床心理士の先輩や仲間が身近にいる」を肯定したのは40.0%。
- ・「遺伝医療の情報入手のためにインターネットを使用できる」を肯定したのは80.0%。
- ・「クライアントにかかわるための研修機会に恵まれている」と肯定したのは31.6%。
(「相談できる臨床心理士」と「研修機会」が他綱目と比べて低い。)

<本調査の結果>

質問2-5-3で、上記の結果について「正しく反映していると思うか」と聞いたところ、回答者9名のうち「そうだと思う」6名、「そうとは思わない」1名、「わからない」と無回答が2名であった。「そうとは思わない」理由としては、「遺伝カウンセリング学会の研修会など他の分野が多い」(No.16)という回答があった。

質問2-5-4で、「この結果から、心に浮かんだことを1つ書いてもらったところ、「相談できる臨床心理士と研修機会が少ないのは、予想通り」(No.8,15)という回答のある一方、「カンファレンスなどでの発言が(医師らとの)連携、理解に役立つ」(No.16)という指摘もあった。

③臨床心理士のネットワーク

質問2-5-5で、「臨床心理士とつながるために参加している学会・研究会など」を聞いたところ、わずか2名が日本臨床心理士会、日本遺伝カウンセリング学会を挙げただけであった。

質問2-5-6で、「どのようなネットワークや組織があれば有益か」と聞いたところ、「玉井真理子先生(信州大学)など先駆的に活動している心理士を中心としたネットワーク」(No.15,8)といった回答があった。

(6) 臓器移植医療分野

①臨床心理士の活動

<第一次調査結果の要約>

- 臓器移植医療に従事した回答者18名のうち、
- ・過去3年間に担当した臓器移植医療の事例数は、10例未満が83.3%で、30例以上は11.1%。
- ・臓器移植医療に従事した年数は、10年以下が88.9%。
- ・職場での立場は、常勤61.1%、非常勤11.1%の順。

- ・サービスの対象は、患者本人48.5%、家族30.3%、医療従事者18.2%の順。
- ・主なアプローチは、本人面接34.2%、心理査定23.7%、家族面接21.1%、サポートグループ15.8%の順。

<本調査の結果>

質問2-6-1で、上記の結果について「正しく反映していると思うか」と聞いたところ、回答者6名のうち、「そうだと思う」2名、「わからない」4名であった。

質問2-6-2で、「この結果から、心に浮かんだことを1つ」書いてもらった。「この医療の性質上、事例数は多くないが、専門的な知識・技術をもって、評価・支援のため、本人のみならず、多くの人々との連携のもとに努めていかなければならない」(No.9)という回答があった。

②臨床心理士の意識

<第一次調査結果の要約>

- 臓器移植医療に従事した回答者18名のうち、
- ・臓器移植医療チームの中で、臨床心理士の役割がはっきりしている」を肯定したのは56.3%。
- ・「患者について主治医と気軽に話し合うことができる」を肯定したのは56.3%。
- ・「担当看護師と気軽に話し合える」を肯定したのは68.8%。
- ・「カンファレンスで臨床心理士として自由に発言できる」を肯定したのは50.0%。
- ・「患者について相談できる臨床心理士の先輩や仲間が身近にいる」を肯定したのは31.3%。
- ・「臓器移植医療の情報入手のためにインターネットを使用できる」を肯定したのは58.9%。
- ・「患者にかかわるための研修機会に恵まれている」と肯定したのは23.5%。
(総じて肯定度が低く、とくに「相談できる臨床心理士」と「研修機会」が低い。)

<本調査の結果>

質問2-6-3で、上記の結果について「正しく反映していると思うか」と聞いたところ、回答者6名のうち「そうだと思う」3名、「そうとは思わない」1名、「わからない」2名であった。「そうとは思わない」理由は、「数が少ないので、ある意味で偏った結果だと思う」(No.10)という回答であった。

質問2-6-4で、「この結果から、心に浮かんだことを1つ」書いてもらったところ、「臨床心理士は移植チーム医療の構成メンバーとして正式に含まれにくい」(No.16)、「心理士が求められてというより、researchのためために臨床心理士から入っているのでは」(No.19)という回答があった。

③臨床心理士のネットワーク

質問2-6-5で、「臨床心理士とつながるために参加している学会・研究会など」を聞いたところ、6名全員が無回答であった。

質問2-6-6で、「どのようなネットワークや組織があれば有益か」と聞いたところ、「臨床心理士の研究グループができればいいと思う。ただし、全国から集めてもまだ少ないので、インターネットを利用する」(No.43)という回答があった。

考 察

1 第一次調査結果の妥当性の検討

(1) 本調査の回答者について

本調査の第1の目的は、第一次調査の量的な結果に回答者にフィードバックし自由記述の回答を得ることで、結果の妥当性や調査方法上の問題点を検討することであった。幸い、第二次調査では、先端医療に従事する経験豊かな42名の臨床心理士の回答を得ることができた。がん医療分野とHIV医療分野以外では回答者が少なく、前2分野と同列に論じることはできなかった。ただ、回答者には各分野の指導的立場の心理士が含まれ、貴重な情報が得られたのも事実である。また、各質問に詳細な自由記述回答が数多く得られた。文章化されたExcelデータ一覧を眺めると、あたかも6分野を代表する指定討論者を並べた大規模なシンポジウムの記録を読んでいるようであった。以下に、分野ごとに結果の要点を述べ、若干の考察を試みる。

(2) 先端医療分野別の妥当性の検討

①がん医療分野

がん分野における臨床心理士の活動および意識に関する第一次調査の結果に、それぞれ63.6%、54.5%が「そうだと思う」との回答があり、おおむね肯定された。ただし、所属ががんセンター、緩和ケア病棟、ホスピスの場合と一般病棟の場合では活動も意識も大きく異なるであろうという指摘があった。たしかに、その可能性は大きいと終われ、今後の調査ではこうした施設間で比較できるよう配慮される必要があろう。

②HIV医療分野

HIV医療分野における臨床心理士の活動および意識の実態に関する第一次調査の結果に、それぞれ54.5%、68.2%が「そうだと思う」との回答があり、おおむね肯定された。ただし、第一次調査での回答者が従来この分野で行われた調査(例えば、兒玉, 2003)と比べて少ないことを指摘する意見があり、活動に関する結果は正確さに欠ける可能性がある。一方、意識に関する結果については、拠点病院間で違いがあるの

ではという指摘はあったものの、かなり肯定されたと考えられる。

③周産期(NICU)医療分野

NICU医療分野における臨床心理士の活動に関する第一次調査の結果について、5名の回答者全員が「そうとは思わない」と回答した。その理由は、2004年に日本未熟児新生児学会で発表されたNICUに専門的に関わる臨床心理士対象の調査結果と異なるから、とされた。第一次調査の回答者には、NICU専属(その多くは非常勤)と他科専属の常勤が含まれており、両者を区別した結果を出す必要があると指摘された。これはきわめて重要な指摘であり、今後の調査の参考としたい。なお、意識に関する結果については、5名中4名が「そうだと思う」と回答したことから、NICU専属の臨床心理士の意識の実態に近い結果と考えられる。もちろん、回答者数が少ないので、結論は保留し、今後の調査に期待したい。

④生殖医療(不妊治療)分野

不妊治療分野における臨床心理士の活動および意識に関する第一次調査の結果について、それぞれ7名中4名、5名が「そうだと思う」と回答し、おおむね肯定された。もちろん、回答者数の少なさから、結論は保留したい。

⑤遺伝医療(遺伝相談)分野

遺伝相談分野における臨床心理士の活動および意識に関する第一次調査の結果について、それぞれ9名中8名、6名が「そうだと思う」と回答し、おおむね肯定された。もちろん、回答者数の少なさから、結論は保留したい。

⑥臓器移植医療分野

臓器移植医療分野における臨床心理士の活動および意識に関する第一次調査の結果について、それぞれ6名中2名、3名しか「そうだと思う」と回答しなかった。この分野では、全国的な臨床心理士の動向に関する情報がほとんどなく、回答者も実態がよくわからないようである。この分野における臨床心理士の実態について、本格的な調査が望まれる。

2 ネットワークの現状と課題

本調査では、先端医療に従事する臨床心理士が所属・参加している学会・研究会等を具体的に把握し、どのようなネットワークが望ましいとされているかを明らかにすることを第2の目的とした。

その結果、がん医療分野、HIV医療分野では、学会や職能団体レベルから個人的なレベルまで多様なネットワークが構築されていることがわかった。周産期(NICU)医療分野、生殖医療(不妊治療)分野でも、

前2者ほど多様ではないが、学会レベルおよび個人レベルのネットワークが構築されていることがわかった。それに対して、遺伝医療（遺伝相談）分野と臓器移植医療分野のネットワーク構築はこれからということがわかった。

次に、先端医療分野ではどのようなネットワークが有益かと聞いたところ、まずは各分野にかかわる多職種、いいかえると各分野で医療チームを構成する多職種からなる、しかも地域に根ざしたネットワークが何よりも重要であるという回答が分野を超えて多かった。その上で、分野を超えた医療領域の臨床心理士のネットワークが求められ、その次に、各分野の臨床心理士のネットワークが求められることがわかった。職種を超えた多職種のネットワークの上に、医療の臨床心理士の分野を超えたネットワーク、さらにその上に、地域を越えた同一分野の臨床心理士のネットワークという三層構造のネットワークを構築することが望ましいとされた。臨床心理士として独自の専門性を高めるとともに、医療チームの一員として機能できることを念頭に置きながら、多様なネットワークを構築していくことが望ましいというわけである。

付記

- 1 本研究は、平成17年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）「先端医療が生み出す心の問

題に関する臨床心理学的援助の研究」(研究代表者：兒玉憲一)の一部として行われた。

- 2 本研究に回答者としてご協力いただいた臨床心理士の皆様、及び調査の実施やデータの整理にご協力いただいた兒玉研究室の院生の皆様に、謝意を表します。

【引用文献】

- 兒玉憲一（2003）. HIV カウンセリング体制の充実強化に関する研究 厚生労働科学研究「HIV 感染症の医療体制に関する研究」平成14年度研究報告書, pp.243-261.
- 兒玉憲一・内野悌司・喜花伸子・森川早苗（2001）. HIV/AIDS カウンセリング11年間の話題分析 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部, 50, 257-262.
- 兒玉憲一・内野悌司・磯部典子（2003）. 先端医療が生み出す心の問題に関する研究の展望 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部, 52, 171-178.
- 兒玉憲一・内野悌司・磯部典子（2004）. 先端医療に関する臨床心理士の意識調査 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部, 53, 185-191.
- 鶴 光代（2005）. 第4回「臨床心理士の動向ならびに意識調査」結果—第1報：主要な項目の単純集計—日本臨床心理士会雑誌, 44, 8-14.